

アートと、健康

村上 誠

こども健康学科長

巻頭の言葉を依頼されたが、言葉にならない表現活動を続けてきた人間としては、いささか荷が重い。そのため、アートと心身の問題を考えさせられた作例を示すことで、与えられた役目を果たすことにする。

1. 誌上展覧会

①『無題』K、紙にボールペン、410mm×330mm

以下紹介する作品は、すべて筆者所有のものであるため、写真も掲載する。作品①は、静岡県内の福祉施設で生活しているKさん（当時50歳半ば男性）が描いた魚の絵。彼はボールペンだけを用いて魚を描いていた。当時（1990年代）は、障がいを持った人たちの表現行為は、まだ福祉の視点でしか語られていなかった。2002年に世田谷区立美術館で『パラレル・ヴィジョン』という国際巡回展が開催され、その頃からわが国でも、エイブル・アートやアウトサイダー・アート、アール・ブリュット（生の芸術）という呼び名とともに障がい者の表現や、芸術教育を受けていない人たちの表現が注目されていった。



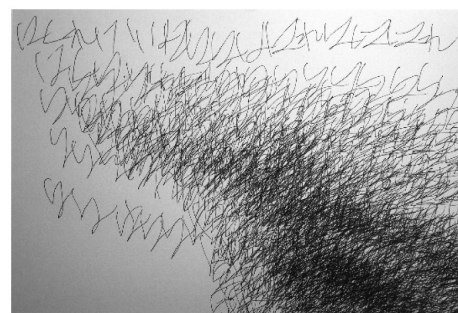
①

Kさんの場合、施設で生活しながら魚を描いている人がいるという噂が聞こえてくる程度だった。2000年に、当時勤務していた大学のゼミ生がKさんのいる施設に実習に行くことになり、そのことをきっかけにしてこの絵を譲ってもらうことができた。緑色のボールペンで魚が緻密に描かれている。彼は毎日魚を描いていた。描かれる度に、色彩と形態が微妙に変化していき、不思議な魅力があった。筆者は、作品はつくってきたが、他人の作品を所有することはなかった。この絵が、筆者のコレクションの最初の1点となった。

②『無題』齋藤裕一、紙にペン、465mm×620mm

前述の『パラレル・ヴィジョン』展以降、意識的にアウトサイダー・アートを見るようになっていた。この絵は、東京のギャラリーで購入した。当時の価格は、一般的なサラリーマンの小遣いでも買えるほどだった。70%が作者と施設、30%が画廊の取り分だと聞いた。

齋藤さんは1983年生まれ。2002年より「工房・集（しゅう）」に所属して制作をしている。描かれているのはすべて文字、しかもそ



②

の日楽しみにしているテレビ番組の名前である。これは「あるある・・・」という当時の人気番組。執拗に描き重ねられる文字は、繊細で書なのか絵画なのかわからない。そういった既存の枠組みを爽やかに越えているようにも見える。工房・集は、平塚市にある福祉施設で、そこに通う人たちが描いたりつくったりした作品を施設のスタッフとの共同作業で作品化（作品以外にも、それらを原案としてバックやシャツ、グッズを製造）して販売する。齋藤さんの作品は、その後ヨーロッパとアメリカで紹介され、2012年からはパリの

ギャラリーと契約を結んだ。筆者の手元にある一枚の紙は、購入した頃の数十倍の価格になっているらしい。彼は今でも旺盛な制作活動をしているそうだが、工房に来た当初は、落ち着かず動き回ってばかりで椅子に座っていられなかったという。描くことで、彼の何かが大きく変化をしたようだ。サッカーが大好きで、身の回りのものは浦和レッズで固めている。

③『わたし』川村紀子、ダンボールに色鉛筆、105mm×145mm

④『無題』川村紀子（原画）、枠のダンボールはスタッフが制作、180mm×180mm×45mm

佐藤真（ドキュメンタリー映画監督）は、1999年に『まひるのほし』を発表した。これは、「工房・絵（工房・集の前身）」で作品をつくる人たちの生活と表現活動を記録したもの。川村紀子さんは、その中でも中心人物の一人として描かれていた。彼女は、ほとんど発話することなく、黙々と絵を描き続けた。『わたし』は小さなものでポストカードになっている。彼女は自画像のような多くの裸体を描いたが、その裸はエロティシズムとは異



なる穏やかで不思議なユーモアに満ちたもので、大変に人気があった。これは世田谷区立美術館で購入したが、入荷するとその日の内に売り切れてしまうものだった。『無題』は、川村さんの原画を複製・縮小してダンボールの箱に並べたもの。

2001年だと思うが、工房・絵の施設長であった関根幹司さんと話をする機会があり、川村さんや映画に登場する人たちの、その後の様子をうかがうことができた。川村さんは大人気だったため、工房の運営上ではとても助けられた。でも、このところさっぱり絵を描いてくれない。有名になって以降、ファンを自称する人やマスコミ関係者が訪ねてくるようになった。すると、これまでほとんど会話することのなかった彼女が、どんどん自分から話すようになり、語彙が多くなるのと並行して、絵を描くことが減っていった。今では工房に遊びには来てくれるのだが、絵を描くことは少ない、ということだった。

2. 人間の表現

ここで紹介したアーティストは、いわゆる知的障がい者として括られるのかもしれないが、人間の表現としての価値は、障がいの有無は関係がない。「障がい」という文字もその定義も曖昧なままの現在、アートが軽やかに「障がい」を無化しつつあるとしたら、それは歓迎すべきことなのかもしれない。しかし、ことはそう容易くはないようだ。

本来アートは、明るさとか純粹さといったものとは逆のものが少なくない。アートであってもなくても、何らかの表現を渴望する人間は、心身のどこかに空洞を抱えていて、その空洞がしきりに何かを呼び込もうとする。そこに何が呼び込まれていくのかは人それぞれでスタイルも多様、時に大きな変容もするから厄介だ。紙が破れるほどの力で色鉛筆をこすりつけていった川村さんの場合にも、それと似たような印象を受けた。しかし、彼女がなぜ描くことに駆り立てられたのか、その本当のところはわからない。わからないということは魅力でもあり、その魅力には、〈健康〉とか〈健常〉といったものとは少し異質なものが含まれている。それは見る者が内に秘めている小さな空洞と共振して、ある時は共感を、そしてある時は反作用を促すのかもしれない。